

●シンポジウム出演者の略歴



日比野克彦（ひびの・かつひこ 熊本市現代美術館館長、東京藝術大学美術学部長）
岐阜県出身。全国各地で、地域に根差した展覧会やアートプロジェクトを行うほか、東日本大震災時には、「自分も何かできないだろうか？」という思いを抱えた多くの人と、ハートのパッチワークをつくり、それらを繋ぎ合わせてタペストリーにして東北に届ける「ハートマークビューイング」を行った。自らの手から何かを生み出すことのできる喜びや、人がもともと持っている”未来を想像する力”を取り戻してもらおうこと、また、人々の気持ちをつないでハートに満ちた景色を取り戻してもらおうことを目指した。



長江浩史（ながえ・こうじ 車いすユーザー／下通2番街振興組合理事長）

熊本市出身。下通繁栄会のメンバーとして、街なかを舞台に音楽やパフォーマンスを展開する「ストリート・アートプレックス」等、多彩な事業を手掛ける。2014年、不慮の事故により頸椎を損傷し車いすユーザーとなる。2016年の熊本地震では、持ち前のリーダーシップを発揮し「楽しい避難所」作りに奔走。リハビリを続けつつ、多様な視点に立った街づくりに取り組んでいる。



金澤佑哉（かなざわ・ゆうや 陶芸家／天草丸尾焼）

天草市出身。国の伝統的工芸品「天草陶磁器」の中心となる窯元の一つ「丸尾焼」の長男。「天草大陶磁器展」「アmaksalローネ」等で活躍し、天草を陶石の島から陶磁器の島へと転換させる活動を行う。熊本地震の際には、弟の宏紀、尚宜とともに「丸尾三兄弟」として、自作の器を無償で配布する代わりに、器を用いた写真を送ってもらい展示するアートプロジェクト型の展覧会「〇〇（マルオ）の食卓」を熊本市現代美術館で開催した。



松岡優子（まつおか・ゆうこ 舞台俳優／公益財団法人筑後市文化振興公社プロデューサー）

熊本市出身。俳優の他、舞台の演出、制作を手掛ける。2016年の熊本地震後、演劇人有志とアートによる復興支援団体「サシヨリアートリバイバルコネクション熊本（SARCK）」を設立。小学校、避難所、仮設団地を仲間と巡りワークショップ等を行う。その経験を生かし、災害後のひとの心のケアにあたる「国境なき劇団」をスタートさせる。2016年秋には公共劇場が休館している中、小さなアトリエで演劇祭を開催した。



佐藤かつあき（さとう・かつあき クリエイティブ・ディレクター／BRIDGE KUMAMOTO 代表理事）

佐世保市出身。福岡、東京でデザイナーとして活動した後、2010年、上天草市大矢野町へ転居。熊本地震後、県内外のクリエイターらで一般社団法人 BRIDGE KUMAMOTO を立ち上げ、被災地のブルーシートを再利用した「ブルーシードバッグ」を製造、販売する。ローカルから世界へ、ソーシャルデザインやアップサイクルプロダクトに取り組んでいる。



岩崎千夏 (いわさき・ちか 熊本市現代美術館副館長)

熊本市出身。設立準備室時代から在籍し、熊本市現代美術館のすべての展覧会運営及びマネジメントに関わる。2016年の熊本地震では桜井武館長の下、現場の指揮をとり、復興に尽力した。熊本市現代美術館発行の熊本地震記録集『地震のあとで』では、「美術館を美術館として開ける、のか？」を執筆。まちと人、アートの仲介役として日々の業務に奔走する。



上川桂南恵 (かみかわ・かなえ 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程在籍)

人吉市出身。令和2年7月豪雨に遭い、直後に絵画「川の底の泥が頭の上にくるかもしれない」を制作し、東京藝大取手キャンパスにて野外展示。今回は～生えてくる Ver.～を展示。制御できない自然の美しさと脅威、物言わぬものに注目。主な活動に、「熊本ヴォルターズ」復興試合のユニフォームデザイン、京都府主催「京都：Re-Search in 亀岡」(2019-2021)レジデンスアーティスト、タウン情報誌『かじゅめる』連載(2019-)、「Tara Jambio Art Project」参加(2020-)



武田萌花 (たけだ・もか 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻 修士課程在籍)

東京都出身。令和2年7月豪雨の際、被災地人吉に滞在しており災害を体験した。現代における「風景の在り方」や「移動」をテーマに、映像や物語を用いた体験型のインスタレーション作品を制作。主な活動に、京都府主催「京都：Re-Search in 亀岡」(2019-2021)レジデンスアーティスト、文化庁メディア芸術祭関連企画『ART MEETS TOKYO』(2020)、「Tara Jambio Art Project」参加(2020-)、群馬青年ビエンナーレ入選(2021)など。